仏教入門⑤『釈迦の仏教』を紐解く！

――甦るブッダの教え――

2021・4・1（木）
コロナ禍にあって
関谷勇

釈迦（しゃか）とは

BC463-383　80 歳没

【釋迦】しゃか「釈尊の属していた部族の名をパーリ語：Sakiya　というがその音写である」【釋迦牟尼】しゃかむに「パーリ語：Sakiya-muni　の音写。シャーキヤ族出身の聖者の意」仏教の開祖である**ゴータマ・ブッダ**のこと。釈迦牟尼（しゃかむに）を省略して「釈迦」と呼ばれるようになった。姓をゴータマ（最も良い牛）、名をシッダッタ（目的を達した者）という意味であり、その家系は古来「太陽の末裔」であると称していた。

ブッダ：बुद्ध buddha）とは、「目覚めた人」という意味である。もともとインドの宗教一般において、すぐれた修行者や聖者に対する呼称であったが、仏教で用いられ釈迦の尊称となった。このため、ゴータマ・ブッダともいう。漢訳の音写は**仏陀**、旧字体では**佛陀**であり、意訳は**覚者**である。仏陀の略称が**仏**であり、「仏教」や「仏像」などの用語はこの尊称に由来する。釈迦の異名は多くあるが、その中でも十号がよく知られている。

【如来】タターガタは、「そのように来た者」または「そのように行った者」を意味する釈迦の尊称である。音写は**多陀阿伽度**、意訳は如来であり、釈迦如来ともいう。また【世尊】バガヴァントは、世の中で最も尊い者を意味する釈迦の尊称であり、漢訳は**世尊**である。仏教では、釈迦牟尼仏、釈迦牟尼如来、釈迦牟尼世尊としたり、またそれらを省略して、**釈尊**、**牟尼**、**釈迦尊**、**仏様**、**お釈迦様**と呼ぶ。（Wikipedia）

原始仏教とは

初期とは 200 年間
アショーカ王まで

【**初期仏教**】とは、釈迦が生きていた時代を含む初期のおよそ 150 年から 200 年の間の仏教をいう。時代区分ではなくオリジナルという意味で**「原始仏教」**という用語を用いる学者も多い。仏教は、約 2500 年前に釈迦が、インド北部ガンジス川中流域のブッダガヤで悟りを開き、サールナートで**初転法輪（初説法）**を行ったことに起源が求められている。発生当初の仏教の性格は、同時代の孔子などの諸子百家、ソクラテスなどのギリシャ哲学者らが示すのと同じく、従来の盲信的な原始的宗教から脱しようとしたものと見られ、『マハー・ワッガ』をはじめとする初期経典では、このとき五比丘（5 人の修行仲間）に説かれた教えが、中道・八正道・四諦・三転十二行相であったとされている。釈迦と五比丘、すなわちコンダンニャ、ワッパ、バッディヤ、マハーナーマン、アッサジの 6 人が阿羅漢となり創設された初期仏教教団は、シュラーヴァスティーのジェータヴァーナー寺院を教団本部とし、インド各地で布教活動を行った。これら釈迦の生涯において重要な各地を八大聖地と呼ぶ。（Wikipedia）

世界三大聖人の比較　出典: フリー百科事典ウィキペディア

前5世紀
歴史の転換軸
普遍思想の登場

ドイツの哲学者カ―ル・スパーヌは
中国・インド・イラン・イスラエル・ギリシャで、
時を同じくして、今日に至るまで人間の思考に
大きな影響を与えた宗教と哲学が、
前500年ごろを中心として生まれたことに注目して、
この時代を人類の歴史の転換の軸となった時代としている。

三大聖人	国	時代	キーワード	
釈迦 BC463-383　80没	インド	仏教の祖 宗教家 哲学者	人間 心と行 対機説法 法（ダルマ）真理 四聖諦・八正道	初期(原始)仏教 十大弟子 ブッダ
孔子 BC552-479　73没	中国	儒教の祖 教育者 政治家	社会 仁と礼 道 現世利益 人間社会・倫理的	論語 孔門八哲 孔子世家譜
ソクラテス BC469-399　70没	ギリシャ	古代ギリシャの哲学者 西洋哲学の祖 思想家	神様 知と理 問答法 ソクラテスの弁明 自然の理法・論理的	プラトン・クセノポン アリストテレス キリスト

時代背景 **『真理』の追求**	魑魅魍魎とした（神霊・精霊・先祖の霊・冥界）アニミズム・シャーマニズムの人間の盲信的な世界から離陸を始めた時代・・・『真理』の追求が興る。 キーワードは『真理』です。.
共通点	①本人の著作がない　②長寿で晩年に勝負　③歴史的な普遍性
ソクラテス	西洋哲学の場においては「一切の哲学はプラトンの注釈である」と言われる。

原典回帰

「原典への回帰」杉本苑子　（1974 /S49/2 月　作家）

大乗の国―日本などの現状と、東南アジア諸国を比較した場合、僧徒たちの戒律護持のすがすがしさひとつの例をとってみても、釈尊の精神が生きて脈動しているのは、むしろ小乗の国ではないか・・・**司馬遼太郎**さんがその遠因に漢字の功罪をあげられた・・・

「漢字がすばらしすぎたため中国語に訳された段階で原典の心を離れ、質的に躍進をとげて大乗の哲理を開華させたけれども、一方に漢字も持つ魅力魔力に、幻惑される幣害も生じた。インドの民衆の発想では、無は単に数としてもゼロなのに、それが漢字の「無」に置き替えられると、たちまち無限大の数量となり深遠な『空』の哲理まで成長してしまう、釈尊離れの一因ここにもある」・・・と。

いったん乖離した原典へ、回帰して、布施なら布施という“薩埵の行願”についても、考察のメスを入れ直す必要があるのではないか・・・漢訳との対比の上でサンスクリット原本に挑まなければならない、要は訳業でなくて、仏教に対する根本姿勢の問い直しをみずからに課す必要があるということなのである。

中村元博士について　**知の巨人**　1912－1999　86 歳没

―インド哲学・仏教学の世界的権威、比較思想の開拓者―

「一切の生きとし生けるものは、幸福であれ、安穏であれ、安楽であれ」（中村元訳『ブッダのことば』）

中村元博士はインド哲学や仏教学を中心とする東洋思想研究の世界的権威であり、日本における比較思想という研究分野の開拓者でもありました。

インド哲学の研究を出発点とされた博士は、セクショナリズムの壁を超えて、世界中の思想を比較研究することにより世界平和への道を示されました。その論文・著作は1500点を数え、今なお世界中の研究者に影響を与え続けています。

東洋思想の巨星「中村元の主なる業績」

松江の中村元記念館の資料から記載

1. 歴史的視野からインド思想を解明
2. 仏典の平易な邦訳
3. 比較思想研究の分野を開拓
4. 論理と倫理の研究
5. 世界東西思想史の構築

中村元博士と松江―博士の生誕地松江市を、東洋思想研究の新たな拠点に―

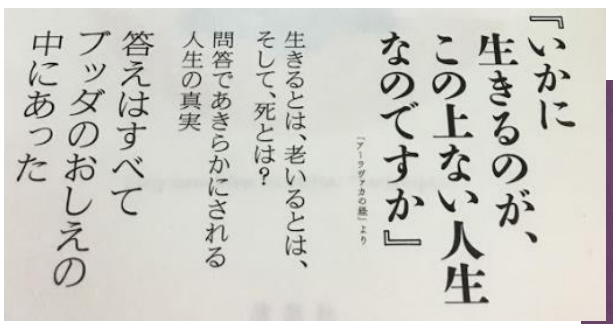
中村元記念館は故中村元博士の業績の顕彰と、東洋思想文化の研究と普及、そして学術の振興に寄与することを目的として、2012 年 10 月 10 日に開館しました。博士のご遺族から寄贈された約 3 万冊に及ぶ蔵書の一部を展示する図書閲覧室、博士の著作と遺品を展示する展示室があります。また山陰における東洋思想研究の拠点となるべく、東洋思想文化研究所・東方学院松江校を設置し、関連学会の誘致、研究会の開催などの東洋思想の研究・教育事業を行っております。　当館は何度でもご来館いただき中村元博士のことばに触れて欲しいという考えから、入館料をいただいておりません。みなさまからの温かいご支援によって運営されています。

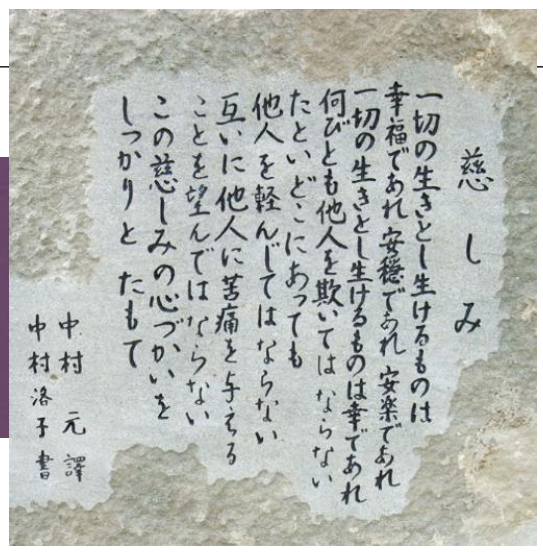
「ブッダの言葉」2014 訳：中村元　解説：佐々木一憲（インド思想研究者）

現代人にとってブッダ・ゴータマとはいかなる存在であろうか。その人物と思想とは今日、多くの人に親しみをもって受け入れられているが、それはブッダその人の語った言葉が我々のもとの届けられたからに他ならない。その最大の功労者が中村元博士（1912-1999）であった。従来の仏教書は出家僧や専門学者のためのもので、教えの核心を生活の言葉で伝えたものではなかった。我々はその言葉を生きる糧とすることが出来なかったのだ。生活の言葉で語られない限り、思想は人々の血肉となることはない。そう確信した博士は“火星語”と揶揄され、わからないからこそ有り難いとされてきた＜人生の指針を仏教に得ようとする人の希望をかなえるために、お経を我々の生活の言葉に翻訳しようと心に決めた…中村元＞　ブッダの教えはこのとき初めて、本来の姿で市井の人に届けられることになったのである。

ブッダの語り口までも伝えるパーリ聖典「スッタニパータ」「ダンマパダ」「マハ―パリニッバーナ経」と次々と訳出され世に送り出された。翻訳において博士は透明になり、ブッダその人のみずみずしい思索と教えの言葉がわれわれの心にまっすぐ届く、その教えの何とわかりやすく、身近に感じられるものであることか・・・。

ブッダの生きた時代のインドは、世の中のしくみが一新し、人々が因襲から解き放たれて自由に思索を始めた時代であった、新奇な思想を唱える思想家・宗教家たちが陸続と現れ、世界について真理について恣に主張をぶつけ合う中で、ブッダはそれらと張り合うことなく、ただひたすらに自らが実践する正しい道（法）を人々に説いて歩いた、そこの説かれた古今東西・老若男女を通じて変わらない「人の道」は、普遍的なるが故に、2500 年の時を隔てた異国の地に暮らす私たち現代日本人の心にすっとは入ってくる。一方で、相手になじみ深い事柄に乗せて教えを説くことに巧みだったブッダの言葉は、彼らが生きたインドの大地、人々の生活に深く根差しており、インドの情景の中で聞いたときに一層いきいきと心に迫ってくる。われわれはここでインドの景色の中に飛び込み、ブッダその人の語る言葉で追体験してみよう、悠久のインドは今も変わらずブッダの生きた時代と同じ姿を見せてくれている。　以上





原始仏教経典とは

中村元のブッダの解説によく出てくる5ッの原始経典

①ダンマパダ<法句経>

中村元訳・ 真理のことば　　26章323句　パーリ語

『ダンマパダ』（Dhammapada）は、パーリ語で書かれた仏典のうちでは恐らく最も有名なものであろう。「ダンマ」とは「法」と訳され、人間の真理という意味であり、「パダ」は「ことば」という意味である。現代語ではしばしば「真理のことば」と訳される。短い詩集で423の詩句より成る。全体は26章に分かれている。この書は漢訳の『法句経』に相当する。『ダンマパダ』は人間そのものに対する、はっと思わせるような鋭い反省を述べ、生活の指針となるような教えが述べられている。そのため世界諸国を通じて人々の愛誦するところとなった。
（中村元氏のあとがきより抜粋）

第１章　「ものごとは心にもとづき心を主として心によってつくりだされる」

①もしも汚れた心で話したり行ったりするならば、苦しみはその人につき従う一車を引く牛の足跡に車輪がついていくように。

②もしも清らかな心で話したり行ったりするならば、福楽はその人につき従う 一影がそのからだから離れないように。

②スッタニパーダ（セイロンに伝えられた経集）教集

中村元訳・ブッダのことば(教え)（詩）パーリ語

1、蛇の章　　蛇の毒がひろがるのを薬で制するように、怒りが起こったのを制する修行者はこの世とかの世とを共に捨て去る一蛇が脱皮して旧い皮を捨て去るとうなものである。（中村元訳）

3、大いなる章　　われはバラモンの母から生まれ人をバラモンと呼ぶのではない、無一物であっても執著のない人、すべての束縛を断ち切り、恐れることなく、執著を超越して、とらわれることのない人、かれをわたしはバラモンと呼ぶ。

③ウダーナヴァルガ　＜自説経＞感興偈

中村元訳・感興のことば　33章　パーリ語

サンスクリット経典は、説一切有部で編纂、法句経に自説経（ウダーナ）を掛け合わせてたもの。

1-3諸のつくられた事物は実に無常である。生じ滅びる性質のものである。それらは生じて滅びるからである。それらの鎮まるのが安楽である。2-1愛欲よ、私は汝の本を知っている。愛欲よ、汝は思いから生じる、私は汝のことを思わないであろう、そうすればわたしにとっては汝はもはや現れないであろう。

④マハーパリニッパーナ・スタッタ(大いなる死の経)（偉大なる寂滅の経）

中村元訳・ブッダの最後の旅　パーリ語

最後の仏弟子に対する説法　　スバッダよ、わたくしは２９歳で、なにかしら善を求めて出家した。スバッダよ、わたしは出家してから５０余年となった、正理と法の領域のみを歩んできた、これ以外には＜道の人＞なるものも存在しない。

⑤　サンユッタ・ニカーヤ（主題ごとに整理された教えの集成）

五集から成る　パーリ語

神々との対話　　ちなみに仏典のなかには多くの神々が登場いたしますが、仏教では世界を創造した神というものは認めません、けれど、人間より優れた神々、目には見えないけれど、不思議な力を持っている神々というもの、これは認めるのです。

悪魔との対話　　世に尊敬される人、幸せなひと（ブッダ）を愛欲で誘うのは容易ではない、かれは悪魔の領域を脱している、だから私は大いに憂いているのだ。

中村元解説　　ブッダの言葉から伝わってくるのは仏教の開祖としての響きではありません、真理を体得した一修行者（道の人）と自らを考えておりました。この＜道の人＞という言葉の中に、ブッダの一生が集約されているといってよいでしょう、法の道を歩むこと、真実の道を歩むこと、その歩むという実践を説いたのだということです。

パーリ仏典(総称)

BC1世紀　仏教の最初期の経典、パーリ語は古代インドの一種の俗語である。

パーリ仏典（パーリ語仏典、パーリ聖典、Pali Canon）、パーリ経典（パーリ語経典）あるいはパーリ三蔵（巴: Tipiṭaka,　ティピタカ、三蔵のこと）は、南伝の上座部仏教に伝わるパーリ語で書かれた仏典である。北伝の大乗仏教に伝わる漢語・チベット語の仏典と並ぶ三大仏典群の1つ。漢訳大蔵経（北伝大蔵経）、チベット大蔵経に対して、『南伝大蔵経』『パーリ大蔵経』（パーリ語大蔵経）　として知られる。

・・・この経典には、日本になじみある大乗仏教の聖典はまったく収録していません、そのこともあって、我が国の伝統的な仏教徒は、明治なってヨーロッパの学者の研究に接するまで、その存在すら知りませんでした、しかしこの「パーリ語三蔵」は前1世紀ごろ成立されたと推定されており、現存の大蔵経のうちもっとも古いものです、この「三蔵」に書かれているものをブッダの直接の教えとすることはできませんが、少なくとも、アショーカ王のマウリヤ王朝時代（bc317-180ころ）にいたる最初期の仏教の思想や生活を知る手がかりを与える唯一の資料で、仏教の源流といえましょう・・・「スッタニパータ」「サンユッタ・ニカーナ」「ダンマパダ」「ジャータカ」（ブッダの過去世物語）などを含んでいます。（中村元）

ナーガルジュナ

2世紀（Nagarjuna、龍樹（りゅうじゅ）とは漢訳名、インド仏教の僧である）

中村元は、大乗仏教は諸法の実相を説くことを標識とした彼の教えは、鳩摩羅什によって中国に伝えられ、三論宗が成立した。インド原典で伝わるナーガールジュナ伝が存在しないため史学的に厳密な生涯は不詳であるが、鳩摩羅什訳と伝えられる『龍樹菩薩伝』などによって生涯の概要を窺い知ることができる。無論、後世のフィクションが含まれると考えられるためそれをそのまま受け取ることはできないが、当時の人々が龍樹をどのように伝えていたかを知る上で重要な資料である。この伝説は学者によっては鳩摩羅什作とも主張されており、真偽のほどは定かではない。(ネット抜粋)

ブッダゴーサ

５世紀（ Buddhaghosa、仏音（ぶっとん）、覚音、覚鳴　）

ブッダゴーサとは、上座部仏教の代表的な注釈者であり、仏教学者。バラモンの家に生まれるが、仏教に帰依し、三蔵研究のためにスリランカに渡る。三蔵（パーリ語経典）の全般に亘るパーリ語の注釈（アッタカター）を書いた。また、『清浄道論』（Visuddhimagga、ヴィスッディマッガ）という著書も残している。(ネット抜粋)

「原始仏教　その思想と生活」 中村元　1970 発行 213P　ＮＨＫブックス

仏教の神髄に迫る

「釈尊にかえれ」の願いが高まる今日、古代インドに派生した原始教団の
熱気あふれる実態と、素朴で現実的な思想と生活倫理を解明する。
全仏教史の底に一貫して流れる精神を根源に遡り追求し、偏見のない正しい道を示す。

まえがき

釈尊（ゴータマ・ブッダ）は、歴史的人格として実際にはいかなる生涯を送り、どのような教えを説いていたのであろうか。釈尊族の聖者、釈尊の生涯は表面的には比較的平穏であって、得に受難の事件として取り立てて言うほどのこともないが、釈尊本来の姿は、インド人一般の思惟方法によってかなり影響を受けているようである。

インド人は一般に個別的な事象よりも普遍的な法（ダルマ）の意義を強調してきたために、歴史的人物としての釈尊の事跡は、神話的な象徴と空想との背後に、奥深く押し隠されてしまった。

しかし近代にいたって、学問的研究が進むにしたがい、釈尊はもはや大乗経典に現れるような神話的な存在ではなくなり、その人間性が見直されて、歴史的・社会的視点から、その教えや思想が検討されるようになった。さらにまた諸学者による仏跡の発掘調査が行われ、その根拠が一層確実なものとなった。

釈尊はいまや神話の世界にとどまることなく、その人格と思想とが客観的に評価されるようになり、単に仏教内部のみならず、東洋と西洋との区分を超えて、世界思想史の中で改めて見直されるようになったのである。

一般に仏教の最初期における原始仏教とは、普通パーリ語の聖典や、それに相当する漢訳経典に顕れている仏教をいうのであり、これに対して、我が国に伝わる伝統仏教は、いわゆる大乗仏教であって、後代の発達した姿を伝えている。

原始仏教については、先年ＮＨＫのＦＭ放送で 12 回にわたり連続放送をしたことがある、その際の原稿に筆を加え、原始仏教における複雑な変遷課程を顧慮しながら叙述したものが本書である。

その内容は拙著「インド古代史」「ゴータマ・ブッダ（釈尊の生涯）」「原始仏教の成立」「原始仏教の思想」「原始仏教の生活倫理」にもとづいたものであり、その教義学的な特殊な論議は省略した、なお、引用した聖句については、参考までに若干の註を付し、出典を明らかにした。

全仏教史の底に一貫して流れている精神を、その根源に遡り、極めて素朴にして現実的な原始仏教の思想と生活倫理について、一般の方々が理解して頂ければ幸せである。　　1970・3 月　中村元しるす

1. 釈尊の生涯

誕生ＢＣ463　釈尊は普通はインド人とだと思われているが、実はネパール人であり、活動したのが主としてインドにおいてであった。ネパールとインドとは別の国であり、インド連邦は共和国であるがネパールは王国である。ネパールの原住民はチベット人やビルマ人に似ており、また日本人ともよく似ていて、間違えられることがあるが、インド人一般とは異なった風貌を示している。父王の名の「浄飯じょうぼん」とは「清い米飯」すなわち「白米に御飯」という意味である、当時シャカ族はすでに稲作を行なっていて、特に白米の飯を珍重していたことがわかる。

若き日　三つの宮殿をもち、紅白の蓮池、白い傘蓋、白米と肉、多くの使用人・・・16 歳で結婚し一子を儲け、何不足のない境遇にあったけれど、それに満足し得ず、物思いに耽る傾向にあり、深く人生の問題に悩んでいた。

求道　29 歳のときついに出家をした、35 歳のとき悟りに達し仏陀となった。

伝道　滅するまで４５年間は教化伝道に徹した、教団の指導者あることを自ら否定して、たよるべきものは、めいめい自己であり、それはまた普遍的な法に合致すべきものである。

2. 原始仏教の基本的立場

諸異説の対立に、釈尊の批判　ゴーダマ（釈尊）は、哲学者たちが互いに争っている事実に対して「彼らは自己の見解に耽溺して汚れに染まっている」と批判した。結局人間の思惟能力をもってしては解決できない形而上学的問題について論争しているために、確執に陥り、さらにその結果としておのずから人間としての道を見失い、はからずも悪を犯している、というのである。このような論争によっては人の究極の目標である解脱に到達できない。

論争の超越　釈尊の教えはもろもろの哲学的見解を超越したもので、かれは争いを捨て去っているのである。したがって「仏は諸の論争を超越している」といわれる。一切の哲学的断定を捨てたならば、人は世の中で確執を起こすことがない、という立場に立っていた、だから最初期の仏教は哲学的にとらわれない立場に立っている、「邪悪を掃い除く」ということをめざしているのである。

毒矢の譬喩　矢にあたった当人が「・・・わかるまでこの矢を抜き取ってはならない」と語ったとする・・・こういうことを知りえないからやがて死んでしまう。「世界は常住であるか常住ならざるものであるか・・・」その人は苦悩のうちに死んでしまう。覚者は医者にたとえられる。人間は精神的な病気に悩んでいるのであり（宗教者）その役割は医者である。

⑴ 無意義な、用のないことがらを議論するな。

⑵ われわれははっきりした確実な根拠をもっているのでなければ、やたらに議論してはならぬ。

かくて妄想（戯論）を捨てることによって、はじめて安らぎ（ニルヴァーナ）に到達しうるという。

中道という　対立する二つの両極端説のどちらにもくみしないから中道といわねばならぬのである、ここに仏教独自の実践的認識への道が開かれているのである。

合理的思惟　経験的に確かめられたものでなければ何ものも信じてならないという態度である。それを譬えていえば、ある地方における代表的美女をまだ見たこともないのに、かの女を恋慕しているというようなものであろう、あるいは宮殿を見たことないのに、それに登る梯子をつくろうとするようなものであろう（DN.VOL1）

部分的真理　一部分を見ているにすぎないのに自分は正しい見解をいだいているという、部分的にせよ真理を見ているという点で真理性がある・・・「群盲象を評す！の譬え」

超越的宥和的性格　仏は 63 種の異端説を克服した、といわれる。ゴータマ・シッダの教えは、その立脚点が他の諸学派の立脚点と次元を異にしていた。だから仏教で考える真理は対立を超えたものである。「真理は 1 つであって第 2 のものは存在しない、その心理を知った人は争うことがない」　　以下省略

原始仏教その思想と生活　　むすび

原始仏教の経典として伝えられるものだけでも厖大な典籍がある。今ここでは、ほんの一端を要略して伝えただけに過ぎない。仏教教団はアショーカ王の頃から急激に増大発展するとともに、教団の分裂もまた始まった、その複雑な発展過程をへて、仏教は全アジアに広がったのである。現在、南アジアの諸国には比較的に古風を伝えた伝統的保守的仏教が栄えている、いわゆる小乗仏教といわれるものの一派（上部座仏教）であり、スリランカ、ビルマ、タイ、カンボージア、ラオス、ヴェトナムの一部に存する、またインドで最近復興している仏教は、大体南方諸国から入ったものである。

これに対して大乗仏教と呼ばれるものは、現在では、北方アジアと東方アジアとに残っている。漢字文化圏である日本、中国本土及び台湾、朝鮮、ヴェトナムの仏教は、中国本土で成立した漢訳仏典にたよる大乗仏教である。またネパールの仏教は、真言密教的色彩が顕著であり、チベットに入って成立した独特の仏教は、西洋人がこれを「ラマ教」と呼んでいる、チベット人は「ラマ教」という名称を嫌い「仏教」と呼ぶべきであると主張しているが、実際には、大乗仏教殊に真言密教色の強いものである、ラマ教は蒙古、中国北部、シキム、ブータン、ラダクに広がりソヴェエト領内のプリアート蒙古人もこのラマ教を尊信している。このように仏教にも諸種の形態が成立しているわけであるが、その根源は遠くインドから発したものである。最初期の仏教の思想・教説は、現在でも諸民族の中に脈々として生きておりに、それぞれの国々の古くからの習俗に溶け込んでいる。現在の仏教が批判と反省を経て洗練されるならば、新たな姿を示して展開し、明日の世界に呼びかけるであろう。（1970 中村元）

＜抜粋＞　筏いかだの譬喩

ブッダの教えには「筏の譬喩」といわれるものがあります。　これは「法」とは、危険でおそろしいこちらの岸から、安堵な向こう岸に、渡るための筏のごときものにすぎない、そして、向こう岸に渡ったならば、筏はもはや無用であり、肩に担いだりして進む必要はなく、執著しないで捨てていい、というものです。つまりブッダは、法によることを勧めるのですが、教義として押し付けるわけではない、法は普遍的ではあるけれども、固定的で動かないというものではなく、現実への現れ方は時と場所によって違っていて、生きている人間に即して展開するものだということす。これは仏教の大きな特徴です。このように、真理を観る立場にたつと、既成のどの宗教にも固執することがなくなるわけです、どの宗教どの宗派に属していようと、結局は、究極の目的である真理に到達すればようということですから・・・・・ブッダの教説にはドグマはない。

＜抜粋＞　安らぎの境地

ブッダの教説の基本的構造は、渇愛を制圧して解脱を得よ、というものです。ブッダのニルヴァーナは決して死後のことではありません、死後安らぎの世界に行くのではなく、今日只今の現実の苦の克服を目ざしています、渇愛の止滅こそニルヴァーナでありました。ニルヴァーナはあくまでも現世の目標であり、現世において実現すべきものであったといえましょう。それではニルヴァーナに入ったものは、肉体的な苦痛からも自由になるのでしょうか、たとえ解脱者といえども病を患えば苦痛がありましょうし、飢えや渇きからは肉体があるかぎり解放され得ないでしょう、それで後世、生存のあるニルヴァーナ（有余涅槃うよねはん）と、もはや肉体もなくなったニルヴァーナ（無余涅槃むよねはん）との二つのニルヴァーナを考えるようになります。つまり前者は煩悩妄執を断じ尽くしてもまだ肉体があって、その束縛を受けるニルヴァーナをいい、後者は、その束縛からもはなれた完全なニルヴァーナをいいます。ただ、ブッダにおいては、現世における即身のニルヴァーナを説いたということであります。

＜抜粋＞　仏弟子の告白･尼僧の告白

スニータ長老の告白　　出家する前、このスニータ長老は人々から「賤しい家に生まれ」「家業が卑しい」と見られていたのです、ところが、二人の最高の神さまがあらわれて、「生まれ良き人」よ、と呼び掛けているのです、つまり「生まれ良き人」というのは血筋できまるのではない、行いがどうであるか、その心が清らかであるかどうか、それによってきまるということです。修行の生活を積んだ人が本当のバラモンであると、二人の神さまが証明してくれたというわけです。

人生の悲惨に苦しんだ尼僧　　キサー・ゴータミーの逸話

キサーは「やせた」という意味、ゴータミーはゴータマ姓の女の人という意味、彼女はサーヴァッティー市（舎衛城）の貧しい家に生まれた女性で、やせていたからそう呼ばれていたといいます。彼女は我が子の亡骸を抱いて「ああ、失ってしまったわたしの子を返してください、わたしの子のために薬をください」と言いながら町を歩きまわっていたときに、ブッダに出会います、彼女はブッダに「いまだかって死人を出したことない家から、芥子の粒をもらってきなさい」と言われて、家々をまわったけれども、どこへ行っても、死人を出したことのない家というのはない、それを知って人生の無常に気がつき、出家したと伝えられています、その告白は人生の悲惨を物語っていて、痛烈であります。　（→ブッダの待機説法とは、種々の事実（現実）から、真理を悟ることによって、自らが、課題解決するという教えである――関谷）

＜仏典をよむ＞「真理のことば」ダンマ・パダ　中村元　2018・2・16　第１刷発行 206P 岩波現代文庫

解説　ダンマパダ（真理のことば）は、人生の指針ともいうべき句を集めた書物で、原始仏教聖典のうちでもとくに有名です。パーリ語で、ダンマとは「人間の真理」「人間の生きる道筋」、パダは「ことば」という意味です。「経」という字にあたることばは原題にはないのですが、むかしから経典として扱われていますので、漢訳では「法句経」となりました。この聖典はとくに南アジア諸国で尊ばれてきましたが、いまでは世界諸国の言語に翻訳されています。外国の言葉に翻訳された回数もまた、もっとも多い聖典といえます。日本では、明治維新以前にはほとんど読まれることのなった経典ですが、大正年間に翻訳がいくつか著わされ、昭和になってからも盛んに読まれるようになりました。

全体は 26 章よりなり、**423 句の詩**から構成されています。　難しい仏教 語というのはあまり出てこず、非常にやさしいことばが 使われています。そして、いろいろの教えが述べられていますが、その一つ一つが、われわれの心の琴線に響くものがあるのです。その詩句は人間そのものへの鋭い洞察に満ちています。

第１章　＜ものごとは心にもとづく＞　心がつくる世界　中村元. 原始仏典（ちくま学芸文庫）Kindle 版.

ものごとは心にもとづき、心を主とし、心によってつくり出される。もしも汚れた心で話したり行ったりするならば、苦しみはその人につき 従う。 ― ― 車をひく（ 牛）の足跡に車輪がついて行くように。(1 句)

ものごとは心にもとづき、心を主とし、心によってつくり出さ れる。 もしも清らかな心で話したり行ったりするなら ば、福楽はその人につき従う。― ― 影がそのからだから離れないように。(2 句)

[解説]つまり影はいつでも人のあとについていきますが、そのようなものだというのです。物理的に、外形的にみれば同じような行為でも、それを 行った人の心が清らかであるか、汚れたものであったかということ によって、その意義がまるで違ってくるというのです。たとえば人に何かを 諭すときに、諭すという行為は同じようなものでも、相手を怒ったような気持ちで言うのと、相手のためを思って言うのとでは、自ずから意義が 違ってきます。そういうことを反省せよ、というのです。

第２章　＜つとめ励むこと＞

この仏教の実践に「つとめ励むこと」という『ダンマパダ』の第二章は、南アジアではとくに重んぜられています。　そのうちの若干の詩を味わってみましょう。

つとめ励むのは不死の境地である。怠りなまけるのは死の境涯である。つとめはげむ人々は死ぬことは無い。怠りなまける人々は、死者のごとくである。(21 句)

われわれはこうして息をして生命があるということを感じていますが、けれど、本当の意味で生きているかどうか、いつも生きていると言えるかどうか。この世にわれわれが生きている期間は限られております、しかし、自分が自分のなすべきことを自覚して、つとめはげんでいる。そこには尊い使命が実現されているわけです。それは不死の境地であると言うのですね。

死なないものをそこに体現しているのです。なにか自分がよいことをする、つとめを果たす、それはそこだけで消えてしまうものではなくて、他の人々に何らかのかたちで働きを及ぼすのです。

ところがこれに反して、自分が怠けているというのは、ただごはんをいただいて身体をつないでいるというだけで、その間、呼吸は続けているのですが、高い境地からみると、死んでいるのと同じことです。人々が自覚し、自分のなすべきことはこれであるときめて、その理想に向かって進んでいくとき、その人は生きている。

さとりというものも、そのつとめはげむ道筋のなかに求められるわけです。後代の日本の仏教では「修証一如」というようなことを申します、これは「修行することとさとりは一体である」ということです、さとりは遠い彼方にあるのではない。いまここで自分のなすべきことを行なう、それがさとりの境地である。それが不死の境地である。漢訳仏典では、「不死の境地」を「甘露の道」と訳しています。つまり甘露のように甘いものがそこにあるというのです。人生の妙味がそこに感ぜられます。

第３章　＜心について＞

それから第３章の、心というものについての反省も、なかなか鋭いところがあります。

心は、捉え難く、軽々とざわめき、欲するがままにおもむく。その心をおさめることは善いことである。
心をおさめたならば、安楽をもたらす。(35)

心はきわめて見難く、極めて微妙であり、欲するがままにおもむく、英知ある人は心を守れかし。
心を守ったならば、安楽をもたらす。(36)

物質的な対象であれば、われわれは見ることができます、しかし、心は見ることができない。わずかに、その働きを通じて、反省することができるわけです。心というものは外からの刺激に応じて、あっちへ誘惑され、こっちへ迷い、といったぐあいのものです。だからひきずり回されないように心を守る必要があります。それによって本当の意味の安楽が実現するのです。

第５章　＜愚かな者＞

眠れない人には夜は長く、疲れた人には一里の道は遠い。
正しい真理を知らない愚かな者どもには、生死の道のりは長い（60）

これも当たっていますね。われわれの生活についてみると、眠れない時には夜は長いし、疲れている時には少しの道のりでもつらいものです。正しい真理をしらない愚かな者には、生まれ、死ぬという迷いの生存の道は、もっと長いというのです。

「もしも愚者が自分が愚であると知れば、すなわち賢者である。愚者であってしかもみずから賢者だと思う者こそ愚者と名づけられる。(63)」　はなはだ逆説的な立言ですが、人間の真実をついているといえましょう。

「愚かな者は生涯賢者につかえても、真理を知ることが無い、匙(さじ)が汁の味を知ることができないように。(64)」うまいたとえです。「匙が汁の味を知ることができない」ように、愚かな者は立派な人のそばにいても、そのほんとうの味わいを知ることができないというのである。

第 11 章　＜老いについて＞

学ぶことの少ない人は、牛のように老いる、かれの肉は増えるが、かれの智慧は増えない。(152)
身体は老いぼれてしまう、これは避けることのできない運命です、しかし本当に老いることなく生きている、その違いはどこにあるのでしょうか。痛烈なことばです。

第 14 章　＜ブッダ＞

すべての悪をなさず、よいことを実現し、自分の心を清らかにすること。これがめざめた人たちのお教えである（183）
これは漢訳では「諸悪莫作、衆善奉行、自浄其意、是諸仏教」といわれ「七仏痛戒偈」ということで知られています。お釈迦様を含めて過去の七人の仏さまがすべてこの教えを説かれた。仏教の実践の根本はここにあるということです。
たとえ貨幣の雨を降らすとも、欲望の満足されることはない。
「快楽の味は短くて苦痛である」と知るのが賢者である。(186)」
お互いに人間の欲望を完全に充足させるということはないわけですから、だれでも、もう少しお金があればいいなあと思いますが「貨幣の雨を降らすとも、欲望の満足されるこちはない」というのは至言だと思います。

第 18 章　＜汚れ＞

鉄自身より生じたさびが鉄を損なうように、罪をなすものたちは、自分のなした行為によって地獄に導かれる。(240)
有名な鉄さびのたとえは「身から出たさび」ということわざがありますが、仏教のことばでいえば、次号自得です。自分のしたことが報いて、その報いを受けるということです。
恥を知らず、烏のように厚かましく、図々しく、人を責め、大胆で不正なる者は、生活し易い。恥を知り、常に清きことを求め、執着をはなれ、へりくだり、清く暮らす人は生活し難い（244）
これはまるで今の世の中を風刺しているようです。人の世の中はうるさいものです、われわれ人間はとかく人の評判を気にするが、ひとの毀誉褒貶を気にするのはつまらないことなのです。

第 24 章　＜愛執＞

ほしいままにふるまう人に渇きはあたかも蔓草のようにははびこる。彼は、森のなかで果実を求める猿のように転々とさまよう。(334)　渇望に悩まされた人々は、追い詰められた兎のように逃げまわる。束縛と執着にしばられ、久しく繰り返し苦悩をうける（342）　人々は欲望に悩まされているということについての、非常にたくみな譬喩がここに出ています。
森の中や町の仲間で猿や兎があっちへ行ったりこっちへ行ったり飛び回っている姿は、実はわれわれが迷っているすがたではないか。

第 25 章　＜修行僧＞

己こそ己の主である。己こその己のよりどころである。それゆえに、馬商人が良馬を制御するように己を制するがよい（380）　自分を救うものは自分である。悩むのも救われるのも自分のことではないか。自分を大切にして、しっかりとした自覚をもって行動することが必要でしょう。究極の責任はやはり自分が取らねばならないものなのです。

インドで仏教はなぜ滅亡したのか？　その不思議！

直接的には 1203 年に、インド仏教（密教）の根本道場であるヴィクラマシラー寺院が北インドのイスラム教政権の軍隊に破壊されて、僧尼が殺されたことで急激に衰退していったとされます。これはむしろ最後の砦が崩れたのであって、4世紀ぐらいから徐々に仏教の内部崩壊が起こっていたようです。

『密教経典・他』（中村元著・東京書籍）

⑴ 支持層である商人階級の衰退保護王朝の滅亡ローマ帝国の滅亡
⑵ 民衆に食い込んでいなかった仏教教団思想的遊戯傾向にあった
⑶ 民間信仰を取り入れる形で真言密教が成立してヒンドゥー化
⑷ 易教化＝後期密教になると、単に「なんでもあり」に堕落していく。
⑸ イスラムの侵攻僧院破壊が滅亡のとどめを刺した

そもそもの衰退して滅亡した原因として、

① 仏教が合理的・哲学的であったために大衆にウケなかった（中村元）
② イスラム教に破壊され、ヒンドゥー教に信者を吸収された
③ 悪貨が良貨を駆逐するようにインド仏教は衰退し滅亡したのである。

参考

石原慎太郎の法華経からの抜粋です（1998）　※赤字の語句は関谷のマトメです。

四諦したい　初転法輪

四諦とは、人生のいろいろな苦労や悩みに満ち満ちているが、それにどう対処するかという方法論です。真理です。

① 「**苦諦**くたい」人間が生きていくということにはさまざまな苦労がつきものであるということをまず自覚して、いたずらにそれをかわして逃れようとせず、腰を据え目を凝らしてそれを直視せよ。
人生は一切皆苦であるという真理

② 「**集諦**しつたい」その苦労や悩みが集まって起ってきた原因を、自ら探って見極めろ。
苦とは煩悩の集まりであるという真理

③ 「**滅諦**めったい」多くの苦労や悩みの原因は人間の真の理を知ろうとしない無知や、執着や欲望からきているのだから、それを淘汰すれば苦労や悩みは必ず消えてしまう。
ようは煩悩を消せばよいのだ

④ 「**道諦**どうたい」第三の滅諦に至る道筋は六つの波羅蜜、つまり心の姿勢を決める努力と、八つの正しい心と身体の修行（道）を行えば必ず達成できるのだという覚りにいたるための原理です。　煩悩を消すには八正道を修めることです。

八正道
はっしょうどう

釈迦が説いた苦悩を消滅させるためのプロセスとして採るべき八つの正しい道。この「正」という言葉の意味、つまり何をもって正しいとするかということだが、それはあくまで真理にかなっている、それもそこらの一般の原理や公理などではなしに、究極の真理、つまり仏教でいう「実相」とは何かと云ことを理解しているかどうかということによるのです。

① 「**正見**しょうけん」自己中心的ではなく、何にも偏ることなく、冷静に正確にものを見つめること。
② 「**正思**しょうし」我を捨てて自分を開いて、あくまで究極の真理に添おうとして考える。
③ 「**正語**しょうご」あくまで真理に添った言葉を選び、嘘、二枚舌、悪口、出まかせは、口にしないこと。
④ 「**正行**しょうぎょう」日常の行為は倫理に沿ったものでなくてはならない。
⑤ 「**正命**しょうめい」生活のための資材、衣食住は、人のためになる仕事をするによって得ること。
⑥ 「**正精進**しょうしょうじん」正しい目的のために、あくまで正しい方法、正しい姿で努力する、
⑦ 「**正念**しょうねん」我に依った利己的な思惑、発想は捨て、究極の真理を目指して考えること。
⑧ 「**正定**しょうじょう」周りからの力で動かされることなく、真理に照らして考え行っていくことです。

六波羅密ろくはらみつ
大乗仏教

波羅蜜というのはサンスクリット語のパラミータのただの音訳で、内容はそのための心の持ち方、心の姿勢で、その意味は悟りの境地に至るための方法、日常の行いということです、

① 「**布施**ふせ」心においても、目に見える物を与えることでも、自分の体を使って尽くすことでも、とにかく他人のために奉仕する行い。執着を捨てて他人に施すこと
② 「**持戒**じかい」自分を導いてくれる人の戒めを守り、いつも謙虚に自分の完成を目指すことで、自ずと、他人を救って助ける力が備わってくる。　自らを戒める
③ 「**忍辱**にんにく」他人に対していつも寛容に向かい合い、他からどんな困難を強いられてもそれを我慢して忍び、どんな得意な時もたかぶらず奢らず心を平成に保ち続ける。苦痛に耐え忍ぶ
④ 「**精進**しょうじん」余計なことに心も身も奪われずに目的に向かって一心に努める。
不断の努力
⑤ 「**禅定**ぜんじょう」何がおこっても動揺したりまよったりせずにいる。
宗教的瞑想の状態である
⑥ 「**智慧**ちえ」実相が何たるかを承知していて、どんな場合にも人間としての正しい道を選んで進む。
仏智見を曇らしてはならぬ。

ちょっと気になった仏教用語

Wikipedia コトバンク抜粋

⑴ サンスクリット：古代インド・アーリア語に属する言語。〈完成された（言語）〉という意味。
中世ヨーロッパのラテン語のように古代インド全域に通じる共通語であった。

⑵ ヴェーダ：BC1000—BC500 年頃にかけてインドで編纂された一連の宗教文書の総称。
「ヴェーダ」は「知識」の意。 バラモン教とヒンドゥー教の聖典である 。

⑶ ウパニシャッド：ヴェーダ文献の総仕上げ、梵我一如の思想である。

⑷ アートマン（個人我）とブラフマン（宇宙我）の二項対立概念。

⑸ ダンマ・ダルマ：法（ほう、梵: dharma、巴: dhamma）とは、法則・真理、教法・説法、存在などのこと。
仏教の時代に入ると「法」は非常に高い位置をもつようになった。理由は仏教が形而上学的なものをさけ、現実の上にたって一切の真実を明かにしようとする立場にあるからであろう。「法」は全仏教にとって非常に重要な言葉となり、思想となり、実践となった。仏教において「法」が教えの中心となったのは、釈迦のさとりが「法」の自覚であったことと、その伝道が「法」の伝達であったことに明らかである。「法」をよりどころとし、「法」を規範としての生活こそ仏教者の生活であるという教法は、しばしば経典に見いだされる。

⑹ ニルヴァ―ナ：涅槃（ねはん）、完全な静寂、自由、最高の幸福の状態かつ輪廻から解放された状態 。

⑺ 初転法輪 しょてんぽうりん： 釈迦 が初めて 仏教 の教義（ 法輪 ）を人びとに説いた出来事を指す。
そこでは仏教の中核概念である 四諦、八正道、中道 が説かれた 。

⑻ 四諦 したい：4 つの・聖なる・真理（諦））とは、仏教が説く 4 種の基本的な真理 のこと 。

⑼ 八正道 はっしょうどう：仏教において涅槃に至るための 8 つの実践徳目のこと。

⑽ 六波羅蜜 ろくはらみつ：大乗仏教の求道者が実践すべき 6 種の完全な徳目のこと。
波羅蜜とはサンスクリット語のパーラミター pāramitā の音写。

⑾ 瞑想 めいそう：心を静めて無心になること。
何も考えずリラックスすること、心を静めて神に祈ったり、何かに心を集中させること、目を閉じて深く静かに思いをめぐらすことなどとされている。本来は冥想と書くと思われる。この呼称は、単に心身の静寂を取り戻すために行うような比較的日常的なものから、絶対者（神）をありありと体感したり、究極の智慧を得るようなものまで、広い範囲に用いられる。現代では、健康の向上や心理的治療、自己成長、自己向上などの世俗的な目的をもって、様々な瞑想が行われている。

⑿ 悟り さとり：（梵: bodhi）とは、迷いの世界を超え、真理を体得すること、涅槃や解脱とも同義とされる。

⒀ ほとけさん：警察関係者が死者を指して用いる隠語

⒁ 乞食 「こつじき」：比丘（僧侶）が自己の色身（物質的な身体）を維持するために人に乞うこと、托鉢のこと。

⒂ 諦 たい：梵: satya サティヤ、真理や悟りを意味する語。

⒃ 慈悲 じひ：他の生命に対して楽を与え、苦を取り除くこと（抜苦与楽）を望む心の働きをいう 。

⒄ 仏説 ぶっせつ：仏が説いた教え。仏教の思想。如是我聞

⒅ 四苦 しく：根本的な苦をドゥッカという。生・老・病・死(しょう・ろう・びょう・し)

⒆ 八苦 はっく：愛別離苦－ 愛する者と別離すること、怨憎会苦 － 怨み憎んでいる者に会うこと、求不得苦ぐふとくく －
求める物が得られないこと、五蘊盛苦ごうんじょうく － 五蘊（人間の肉体と精神）が,
思うがままにならないこと、 数合わせ 4×9＋8×9＝108 の煩悩となる。

⒇ 無記 むき：仏教経典に回答を記せないので「無記」と表現される、死後の在り方、世界の存続期間など

㉑怠惰 だいだ：「怠惰」に関する概念としてキリスト教における「七つの大罪」にも挙げられている。

㉒顕教 けんぎょう：衆生の能力や素質に応じて、言葉で明らかに説かれた教え

㉓密教 みっきょう：秘密の教えを意味し、秘密仏教の略称ともいわれる

㉔諸行無常 しょぎょうむじょう：「すべてのことはうつろいゆく」という真理

㉕真理 しんり：いつどんなときにも変わることのない、正しい物事の筋道。真実の道理。
「遠不変の真理」「真理の探究」 仏語：真実で永遠不変の理法。真如。

釈迦の仏教に関しての**所感**・・・関谷 2021・4・1

⑴ 「釈迦」の呼び名は、世界的に広く使われているのは「ブッダ」、インドでは「ゴータマ・ブッダ」・・・仏の十号（如来・世尊・・・）など・・・だんだんと存在を神格化して多くの呼び名が生まれていった。
⑵ 「一字不説」
原始仏教とは、釈迦から 200 年以上、その教えは、おそらく正確に語り継がれていった、口伝である。よって、アショカ王の石碑が発見されなければ釈迦は架空の人、歴史上存在しないことになっていた、インドは文献が残らない国とか・・・日本でも明治に歎異抄が公開されるまで親鸞が架空の人物ではないかといわれていたから・・・ね。
⑶ 「漢字の功罪」司馬遼太郎のコメントにあるように、漢字に翻訳された仏教はインド仏教から中国仏教へと発展進化して有難みを増したが、難思難解・・・よって欧州には漢字は難しかった。
⑷ 「慈しみ」とは簡単かつ単純かもしれないが、中村元がたどりついたことばです。
幸之助創業者もまた「素直な心」と行きついたことばもシンプルであったと思い出した。
⑸ 仏教は「心の制御コントロール」が原点である、
まして現代は「欲望の最大化」が追求する幸福なのである
「人間性は 2500 年たっても、変わりません」（中村元）・・・というが、
科学文明は進歩したが、人間の智慧（脳）は進化していないということでもある。
⑹ 真理を追究したという普遍的なインド仏教が、何故、消滅したのか？
水清ければ魚住まず？泥に咲く花（蓮華）の泥を忘れた？

――仏教とは･･･何であるのか、ひとこと――

仏教とは・・・苦の克服をめざす実践哲学である。
無常の教えから俗世間の束縛迷い苦しみから抜け出し、
努め励むことによって、さとりに至ることである。

＜原始仏教の思想と生活倫理から＞
すべて悲しきことをなさず、良いことを行ない、自己の心を浄めること
・・・これが仏教の教えである。

「仏教は慈悲の宗教である」中村元
「慈しみ」の心こそ、釈尊の悟りの神髄であり、「仏教のこころ」である（中村元）
ひろさちや「仏教というものは見方の変革である」

おこがましいことながら・・・所信表明・・・
⑴ 年金ボケしてはならん・・・ボーッと生きてんじゃねーよ！チコチャン
⑵ 年相応に変化しつづけよ・・・諸行無常を知り無我の境地を悟る
⑶ 死ぬまで怠ってはならん・・・怠惰ＮＧ、修行ＧＯ
モットー
我 80 にして苦を離れ人生を愛でて瞑想を楽しむ（論語）
離苦得楽の世界
＜結論＞残念ながら解答は見つかりません、
問題提起に終わりましたが、悪しからず（関谷）